

幼児教育とリトミック(2)

Rythmique in Childhood Education (2)

(2000年3月31日受理)

曾我部 司
Tsukasa Sogabe

Key words : 集中力, 模倣活動, エミール・ジャック・ダルクローズ

序 論

私たちは日常、様々な「音」の中で生活し、「音楽」を愛し、楽しんでいる。幼児期の子どもたちは「音楽」が聞こえてくると、自由に、また、楽しそうに身体を動かし、動物になってゆっくり歩いたり、乗り物に乗って想像したり、自分なりに表現することを楽しんでいる。

しかし、加齢とともに、子どもたちは音楽離れをしてはいないだろうか。幼児期には、環境を整え、雰囲気づくりに努め、まず「音楽」を好きにさせなければいけない。それには、食事中やおやつ時間にBGMを流すのも一つの方法であろう。その内容としては、「軽い音楽」「穏やかな音楽」を流し、ゆったりとした心にするのが大切である。また、車の中でクラシックの名曲を流すのも一つのアイデアであり、いわゆる子どもの生活に直結した身近な音楽を選ぶべきである。

しかし、何とんでも母親が子どもに及ぼす影響は大きい。赤ちゃんが最も多く接するのは母の声と家庭内の音であり、この音が感受性発達を左右するカギとなり、優しい穏やかな母の声は、子どもたちの心身にやすらぎを与え、良い影響を及ぼすであろう。

子どもの興味の中心は遊びであり、幼少期の音楽は楽しく面白いと感じるよう、工夫していくことが大切である。音楽を「教養」「勉強」「技術」として考え、親や教師が子どもの芽を摘んではないだろうか。

最近、幼児教育においてリトミックに関心を寄せる声を耳にする。リトミックとは、音楽と共に動きながら全体的に、また全感覚的に音楽を感じ、表現し、調和を持てる子どもを育てようとするものであるが、その内容、教育法はあまり知られていない。

ちなみに、保育者をめざしている中国短期大学幼児教育科学生141人を対象に調査してみると、

1. リトミックの内容、教育法を知っている33%。知らない67%。
2. リトミックに興味がある80%。ない20%。

3. 今までにリトミック教育を受けたことがある8%。ない92%。という結果である。

そこで、リトミックとはどういう内容のものであるのか、子どもたちにどのような影響を及ぼすのか、一考察してみることにする。

リトミックにおける基礎リズム

リトミックの言葉の意味は「良いリズム」ということであり、すなわち、「リズムを素材とし、動きと音楽を融和させる」ことにある。こうした教育を施すことによって自然の世界に融和し、調和の持てる子どもを育てようとするところにねらいがある。

ピアノや電子オルガンを初め、色々な楽器を習っている子どもも多い。楽譜が読めるようになり、楽譜どおりに弾けてリズムも間違っていない。先生のおっしゃる言葉を受入れ、耳で聞き、机上の勉強で終わってはいないだろうか。補助として言葉は有益であるが、果たして音楽を感じているだろうか。リズムというものを体感しているだろうか。

リズムというものは、生活していく上でも基本になるものである。リズムカルに掃除が出来、料理が出来たりすると時間的にも早いし疲れも少ない。この動きというのは、基本的には力を入れること、抜くことの繰り返しであり、この動きと力の関係がうまくいかないと、余分な力が加わり、長く歩いたりすると疲れやすく、そのままリズムが悪くなり、歩き方も悪くなる。歩き方が悪いと健康にも悪い。

エミール・ジャック・ダルクローズは「リズム意識とは、物理的運動と精神的運動との関係をとらえる能力であり、更に感情や思考の刺激をそうした運動へと伝える変化を感じる能力である」と述べている。具体的にエネルギーの使い方、感覚を動きによって一つにまとめていき、自分の意志を持たせるのである。さらにダルクローズは「人間の身体を目的としようとしないで、手段、すなわち最も純粋な感動、リズムの感情の表現手段にしようとするならば、しかも、静的ではなく、動的な要素をはっきり見極めるならば、リズムの感情は人間の身体に、同様の作用（純粋さ）とそしてまた美しさと清らかさを送り返すのである」とも述べている。

リトミックにおける集中力

リトミックを経験することによって様々な効果を得ることができる。第一に集中力である。リトミックというのは、音楽をとおして、ただ筋肉を使うことだけを学ぶのではなく、反射的に何かに反応していくのである。たとえば、ある動作の途中次の動作に移れ、即反応出来なければいけない。即時反応である。合図によって即可能にする。これが反応という動作である。

リトミック教育では、リズムに反応させることによって潜在意識の増大を図ろうとしている。例えば、幼児はピアノの音楽に合わせて散歩を楽しんでいる。突然ピアノのスキップのリズムによって、スキップをしながら飛んで行く。次のリズムで、幼児は疲れ切ってゆったりと歩く。このよう

にリズムを「→」→「♪」→「→」に変えると幼児は即反応して、音楽に集中することを次第に覚えてくるのであり、この即興的な反応行動を保持するためには、それに対する意識を幼児が持つことが必要で、しかも即座に正確に反応するためには、無意識（潜在意識）的にもその行動がとれなくてはならない。そういう感覚機能が育ってこそ、幼児はリズムの流れに乗れるようになる。

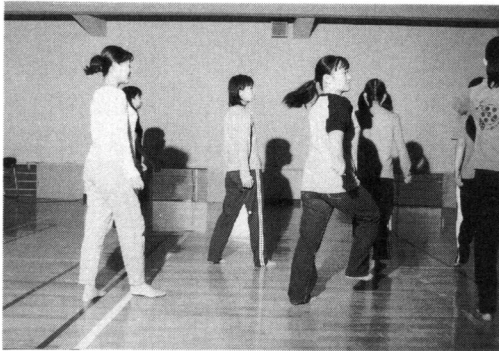
では、どの様に訓練するのか、簡単な実際例を示してみる

☆保育者の「右」という指示で「→」=80の速さで右手で床を連続して軽く叩く。途中「左」の指示で左手へ変えて連続して叩き、「右」「左」の指示を何度も繰り返す。この動作に加えて、「両手」の指示を出してみる。「両手」の指示は両手で膝を叩くこととする。

この「右」「左」「両手」の三つを不規則に指示されると、幼児にとっては難しく、集中していないと反応出来ない。集中力が必要となってくるのである。

集中力を高めるリズム訓練をもう一例示してみる。

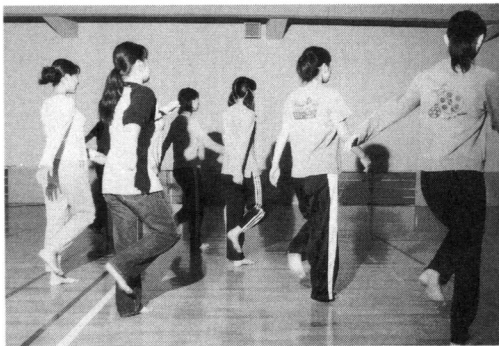
☆ピアノ（音楽）に合わせて歩行。歩行の途中保育者の「右」という指示で右へ、(写真1)「左」という指示で左へ、(写真2)「バック」で後ろへ、(写真3)「前」で前進する。(写真4)



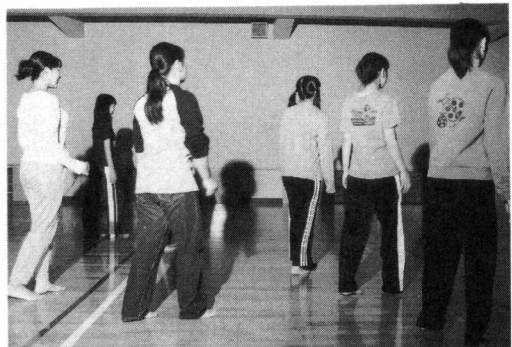
右へ (写真1)



左へ (写真2)



後ろへ (写真3)



前へ (写真4)

このように、即時に全体的にリズムに乗り、受入れ、反応していくのである。

リトミックにおける想像力

リトミック教育の大きなねらいの一つは、想像力を養うことにある。何かをただ想像するだけではない。美しい花、大きい花、小さい花だけを想像してはいけない。何が大切かという、その事に対するエネルギーである。ゾウのような大きな動物を想像する時、単なる形ではなく、エネルギーとして想像しなければいけない。大きさのエネルギー、長さのエネルギー、こういうことを様々な活動、たとえば模倣活動、音楽活動をとおして養っていくことが、リトミック教育において大切なことである。

リトミックは、身体を動かしてゲームをしたり、遊んでいるのではない。そこには必ず目標をもっている。たとえば、動きの中に「 \square 」, 「 \square 」, 「 \square 」音符を身につけていき、リズムという目標を達成しながら、想像力、集中力を高めていくのである。

リトミックというものを誤解している人もいないでもない。リトミックは同じ動きで画一化して、体操と同じではないかとか、ダンスとどう違うのかという疑問を持つ人もいる。

リトミック教育の目的は「私は知っている」ではなく、「私は感じとる」とするところから、ある種の個人的な経験なのであり、体験することが必要である。エミール・ジャック・ダルクローズは「体操やダンスは美学的観点から形式を外画化し、視覚的に印象づける模倣による表出から出発しているが、リトミックでは、身体表現の効果は、感情によって命令される精神状態の自然な表出、つまり、感情表出が感覚機能に直接反応し、動的造形として表出される」と述べている。さらに「わたしは最も天才的な能力をもった芸術家であっても、わたしたちの行う特別な練習に厳密に従ったものでなければ、リトミックの実践とその効果について、十分にそして正しく評価し、その理由を完全に認識して判断するなどということはできないと思う」と続けている。このことを適確に説明した画家のポール・ベルレは「自分自身で実践してみることなしに、リトミックについて決定的な判断を下すことは不可能である。わたしは愚かにも、完全に身体で知る前に、画家として眼だけで批評したことがある。リトミックが心的、身体的な全ての能力を動作として演出することによって得させてくれる歓びといったものは、わたしに忘れることのできない思い出を残してくれた」と述べているように、身体自体が楽器にならなければいけないのである。

リトミックにおける模倣活動

リトミック教育の大きな要素に模倣活動がある。模倣といってもゾウやウサギの真似をするだけではない。大きいゾウもいれば小さいゾウもいるし、耳の大きいゾウもいれば小さいゾウもいる。また、自然界には寝ているゾウもいるかもしれない。そうした形の違いの想像的活動でなければいけない。ゾウとウサギの強弱の違い、エネルギーの違いを感じなければならぬ。

リトミックにおける動作の模倣、リズムの模倣の実際例を示してみる。

☆動作の模倣（写真5）

二人組になりAさんBさんをきめる。Aさんは自由に歩き、BさんはAさんの真似をしてついていく。途中保育者が「ドン」と指導用タンバリン（太鼓）を打つと交替する。この時の動作は、手を大きく振ったり、足を大きく上げたり、カニさん歩きをしたり変化をつける。



（写真5）

☆リズムの模倣（写真6）

二人向かい合って立つ。AさんBさんを決め、Aさんはピアノ（音楽）に合わせて右へ左へ、上へ斜めへと自由に手拍子を打つ。BさんはAさんの動きにすばやく反応し、Aさんの打つ手拍子についていき、同じ場所の手拍子を打つ。この時、手拍子を2拍ずつ打ったり、Aさんの1拍目という指示で1拍目のみ、2拍目という指示で2拍目のみ手拍子を打ち、変化をつけるのも一つの方法である。



（写真6）

このように、即時にリズムに反応し、形の違いを感じ、それを理解し、表す。動きを模倣し、初めて表現という言葉が生きてくるのである。

以上のことから、リトミックによって私たちは、幼児たちの、また、自己の持っている可能性をできるだけ大きく引き出すことができるのではないだろうか。感じる心、考える頭脳、実行する身体の調和的発達を願いながら、リトミック教育を推進していくつもりである。

参 考 文 献

1. フランク・マルタン他著 板野 平訳「エミール・ジャック・ダルクローズ」全音楽譜出版社
2. 武石 宣子著「幼児とりトミック」相川書房
3. 板野 平他著「みんなでやろうりトミック」ひかりのくに
4. 曾我部 司編著「楽しいりトミック遊び」大学教育出版

参 考 資 料

1. 全日本りトミック音楽教育研究会岡山支部セミナー